

創業の想いを未来へ



枅谷 義雄*
Yoshio Masutani

古河電工グループの創業者、古河市兵衛翁は、わが国の近代化の過程で、幾多の困難に遭いながらも、旧来の因習を改めながら産銅事業の発展に邁進しました。時を同じくして、明治初期の頃、わが国にも「電気」の存在が伝わり、明治15年には銀座でアーク灯が輝きました。当時の世情を顧みれば、まだまだ不安定な世の中でしたが、市兵衛翁は「日本を明るくしたい」との想いで電線事業の発展に尽力しました。現在の文脈では、社会課題の解決に資する新事業の創出であり、「電気」の社会実装による（当時の日本にとっての）スマートシティの実現だと言えるでしょう。

それから135年が経ち、古河電工グループは今、「創業の想い」を未来へ繋げようとしています。昨年発表した「古河電工グループ ビジョン2030」(以下、ビジョン2030)は未来への道標。古河電工グループは、「地球環境を守り」、「安全・安心・快適な生活を実現する」ため、情報／エネルギー／モビリティが融合した社会基盤の実現を目指します。そのためには、既存の事業を成長させるだけでなく、新しい事業、とりわけイノベーションによる新事業の創出が強く求められています。

イノベーションは「技術革新」と訳され、新しい技術の発明だと思われがちです。しかし、本来の意味は、様々な場面において今までになかったものが新しく取り入れられ、社会の役に立つことです。今日の社会は、地球規模の環境問題、自然災害（地震、台風、山火事など）、

少子高齢化による労働人口の減少などに起因する多くの課題を抱えています。古河電工グループは、それらの課題に対して「持続可能性」という視点で解決を図ろうとしています。例えば、これまで取り組んできた社会インフラの構築。現在はその老朽化対策を社会課題と捉えて新事業の創出を目指しています。

また、自社の技術を起点とした新事業の創出に限らず、スタートアップとのオープンイノベーションや海外の技術やビジネスモデルの探索など、様々な手法で新事業の創出を進めています。SVIL (Silicon Valley Innovation Laboratories, Furukawa Electric) は、シリコンバレーにおける最先端の技術・市場の情報収集と、オープンイノベーションを積極的に推し進め、破壊的イノベーションの一翼を担うために設立されました。

古河電工グループは設立以来、新技術を大切にしながら様々なことにチャレンジし続けてきました。そして今、ビジョン2030の実現に向けて新たな一歩を踏み出しました。次の世代を支える礎となるこの一歩を踏み出すにあたり、社内外のステークホルダーの皆さまとの共創を益々進めてまいります。

古河電工時報(139号)を発行するにあたり、新事業の創出に掛ける「想い」と「情熱」を皆さまと共有できれば幸甚です。今後とも皆さまのご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

* グローバルマーケティングセールス部門 グループマーケティング統括部 部長